
短編「神に選ばれた男 其の一」

鳥海ドゥンガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編「神に選ばれた男 其の一」

【Nコード】

N6781F

【作者名】

鳥海ドウンガ

【あらすじ】

百年に一度、魔獣の封印をかけなおす役目にある救世主。神によって選ばれし救世主が今現れる！

とある王国の神殿に、世界を滅ぼしてしまつほど強い力を持った魔獣が封印されていました。

魔獣は封印の術によって閉じ込められているのですが、その術は一〇〇年間しか効力が続かず、効力が切れるたびに術をかけ直すなくてはいけませんでした。

封印の術を使うことができるのは神に選ばれし救世主だけです。救世主は封印が解ける二〇年前になると神によって指名されます。誰が選ばれるのかはまったく予想できず、まさに神のみぞ知るです。選ばれたいと思っても選ばれないし、選ばれたくないと思っても選ばれてしまうこともあります。

救世主に選ばれると頭のどこかに星形のアザができます。歴代の国王たちはそのアザを目印にして救世主を見つけ出し、一〇〇〇年以上も封印を維持し続けてきました。

現在、国を治めているのは第五五代国王です。その国王のもとへ、魔獣が封印されている神殿の神官がやってきました。

「王様、今年は救世主が神によって指名される年でございます」「おおそうか。ということはあと二〇年で封印が解けてしまうのだな」

「さようでございます。なるべく早く救世主を探し出し、封印の術の準備にとりかかるのがよろしいと思われます」

「わかった。ではさっそく將軍に命じて救世主を探させよう」
救世主はすぐに見つかりました。

王様のいる玉座の間に、將軍とともに救世主がやってきました。王様は救世主を見るなり思わず「えっ」と声を上げてしまいました。

やって来た救世主は御歳九〇歳。港町で魚の干物を売って暮らし

てきたジユゼツペというヨボヨボのおじいさんでした。

その場にいた全員が思いました。

「この人、あと二〇年もたないだろ！」

おじいさんがプルプルと震える手で王様と握手をします。

「王様、救世主のお役目はお任せください。必ずや成功させてみせましょう。歳なんぞには負けはしませんぞ」

「う、うむ。国の未来を左右する大事な役目である。失敗は許されぬぞ。長生きしてもらわねばな・・・」

王様は心配そうな顔をしています。

「これまで、病気という病気にかかったことはございませぬ。救世主に選ばれたからには神のご加護もありますでしょう。ご安心ください」

「そ、そうかそうか。それならば少し安心であるな。これから王宮で暮らすことになるが、何か不自由があれば専属の召使いたちに何なりと申すが良い。体調が悪くなったり、気分が悪くなった時はすぐに専属の医者に相談するのだぞ」

「わかりました。こんな老いばれに手厚くしてくださいありがとうございますことですじゃ」

ジユゼツペいさんはお供の者に連れられて自分の住む部屋へと向かいました。

王様はジユゼツペいさんがいなくなると、脇に立っている神官に尋ねました。

「・・・大丈夫なのか？」

「何とも言えませんが、神がお選びになった方ですので大丈夫だろうと思います。九〇歳になるまで病気ひとつしたことが無いというのは、神のお力のお陰でありましょう。なので、これから先も神によつて救世主のご寿命は守られていくんじゃないかと・・・」

「なるほど。そう言われてみればそうだな。神がお選びになった救世主だ。普通の人間と一緒にいるわけがないな」

王様はとりあえず安心しましたが、油断はせず慎重に事を進めてい

こうと思いました。

王宮で暮らし始めたジュゼツペじいさんは、最初こそ謙虚でまじめに生活をしていましたが、召使い達がなんでも言うことを聞いてくれる環境に味をしめ、段々とワガママになっていきました。

「スープの味がうすい」、「お茶が熱い」などの簡単なワガママから始まり、旬の季節にしか取れない食材をどうしても持って来いと言ったり、同じ食器は二度使うと言ったり、一生懸命働く召使いに対して「お前の顔は飽きた」といつてクビにしたりしました。

二〇名いる専属の召使いたちには当然、不満がたまっていきました。ついに女の召使いたちの体を触るようになって、さすがに我慢できなくなり、王様に「どうかしてほしい」と陳情書を書きました。王様は「困ったなあ」と思いましたが、下手に注意をしてストレスを与えたくありません。ストレスは病気のもとです。今現在は健康ですが、いつどうなるかは分かりません。王はなるべくリスクは避けたいと考えて、召使いたちには「国の未来を確かなものにするために耐えて欲しい」と言いました。

これによって更に味をしめたジュゼツペじいさんは、今度は金の浪費を始めました。

国家の予算を使って、わかりもしない芸術品を買い集めてみたり、高価な家具を集めてみたり、ギャンブルに大金をつぎ込んだりしました。

中でもギャンブルぐせはひどく、年間の国家予算の一角にも当たる額を平気で使い込みました。

これにはさすがの王様も頭を痛めました。国の未来のためだと割り切り、増税をすることで財政の穴埋めをしました。

ジュゼツペじいさんのギャンブルぐせは年々悪化の一途をたどり、国の財政を圧迫し続け、毎年の増税に国民は悲鳴をあげました。王様は不満のくすぶる国民を納得させるために演説をしました。

「この増税は、来るべく危機を回避するために必要な増税である！目先の小さな満足を手にして未来を棒に振るか、あとほんの数耐

えて平和な未来を手にするかと問われれば、私は耐えて未来の平和を手にしたい！いや、手にしなければならぬのだ！苦しいのはわかる！だがあと数年耐えてほしい！この国に住む全ての人々の平和のために！」

この演説で、国民は国の未来を守るため、苦しい増税にも耐えようと一致団結しました。

そして、いよいよ封印の日まであと一日という時、さんざんワガママ放題、無駄遣いし放題で好き勝手やってきたジュゼツペじいさんがポツクリ逝きました。医者によると普通に寿命だそうです。かなりの長生きでした。

結果からみると、ここまで長生きできたのは神の力はまったく関係なく、ただ単に健康優良おじいさんだったというだけでした。

今、国は魔獣が暴れてピンチです。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6781f/>

短編「神に選ばれた男 其の一」

2010年10月14日18時05分発行